

C 2 1 5

『曾根崎心中』における「生」「死」「喜」「悲」

菊池 聡子[○] (白百合女子大学) 齋藤 兆古 (法政大学) 井波 真弓 (白百合女子大学)

堀井 清之 (白百合女子大学)

"Life", "Death", "Joy" and "Sorrow" in "The Love Suicide at Sonesaki"

Satoko KIKUCHI, Yoshifuru SAITO, Mayumi INAMI, Kiyoshi HORII

ABSTRACT

With the widely spreading use of modern personal computer, modern language studies are usually carried out by means of the personal computers. In this paper, we try to statistical analyze the elements of feeling: "Life", "Death", "Joy" and "Sorrow" in "The Love Suicide at Sonesaki" written by Chikamatsu Monzaemon along with comparison our approach with the previous studies. As a result, it is clarified that there is deep attachment to "Life" in situation for "Death". Further, it is suggested that regardless of large quantity in total, "Sorrow" coincides on few quantity of "Joy" in number, in the first and the last paragraphs. As a whole, the same tendency of conventional views is observed but our approach gives the views in much more details. Thus, our approach makes it possible to extract the detailed characteristic of story compared with those of conventional one.

Keywords: Qualitative and quantitative studies, Life, Death, Joy, Sorrow

1. 緒 論

本稿の目的は近松門左衛門が人形浄瑠璃『曾根崎心中』¹⁾を創作するにあたり、主人公の感情を初段から最終段までどのように描いたかを検証することである。

『曾根崎心中』は近松門左衛門の代表作で、若い男女の心中を描いた作品である。本作品は心中という悲劇を描いているが、情調は、抑えきれない生の歓舞の声²⁾である。また、心中する残酷な場面に、命を捧げる歓喜のおののきがまじりこんでいることにより陶酔をもよおす³⁾との既往研究がある。さらに、初段の「観音廻り」から最終段に向かう「道行」の関係について両者は共に1つの「道行」であり、循環している⁴⁾との指摘がある。

本稿では主人公の感情を統計的に処理するとともに、上述の既往研究の整合性を考察するものである。

2. 解析方法

2.1 解析対象

『曾根崎心中』は、元禄16年(1703)に大阪竹本座で初演された近松門左衛門作の世話浄瑠璃である。

主人公は、醤油屋の手代の徳兵衛と遊女のお初。彼らは愛し合う仲だった。しかし、徳兵衛の主人でもある実の叔父に姪との結婚を勧められ、叔父は徳兵衛の知らないうちに徳兵衛の継母と結納を交わしてしまう。徳兵衛はお初を思い結婚を断ったのだが、そのために叔父の怒りを買ってしまう。徳兵衛は結納金を返さなくてはなら

なかったのだが、友人・九平次にその金を貸してしまう。徳兵衛は九平次に金を返してもらおうとするが、九平次は借金など知らぬと、逆に徳兵衛を公衆の面前で詐欺師呼ばわりしたうえ、散々に殴りつけ面目を失わせる。結納金を返せず、詐欺疑惑をかけられ、公衆の面前で叩きのめされた徳兵衛には、死んで身の証を立てるより他に、名譽を回復する手段がなかった。死の覚悟を決めた徳兵衛は、密かにお初の元へ訪れる。お初は、徳兵衛を縁の下にかくまった。しかし、そこに九平次が現れ、散々徳兵衛の悪口を言う。怒りに震える徳兵衛を足で制し、お初は徳兵衛と共に死ぬ覚悟を伝える。その夜、徳兵衛とお初は曾根崎天神の森で心中したという話である。

2.2 要素の選択と解析方法

1. 『曾根崎心中』における、「生」と「死」、「喜」と「悲」の感情を連想させる文章の文字数を段ごとに数える。
2. 縦軸に文字数、横軸に段をとりグラフ化する。Table 1に要素を示す。

Table 1 Selected Element of "Life", "Death", "Joy" and "Sorrow" in "The Love Suicide at Sonesaki"

| 要素 | 事例 |
|---------|--------------------------|
| 第1要素「生」 | いつもはさもあれ此の夜半はせめてしばしは長からで |
| 第2要素「死」 | 色に焦れて死なうなら |
| 第3要素「喜」 | 顔を見合せア、嬉しと |
| 第4要素「悲」 | 曇る涙にかきくれかきくれ |

3. 結果と考察

3.1 「死」と「生」の解析結果

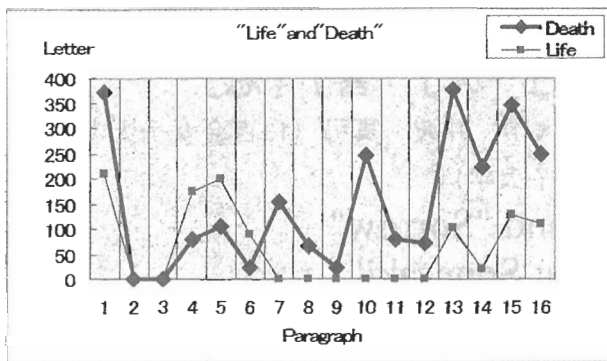


Fig. 1 Elements of "Death" and "Life" in "The Love Suicide at Sonesaki"

「死」の表現は初段が最も多く、2、3段でゼロとなり、増減を繰り返しながら徐々に増えていく。「生」は初段を除き、前半は「死」より多く、しかも変化は連動している。7段で死を意識すると同時に「生」はゼロとなるが、後半からは再び「死」と連動し、増加傾向にある。

島村抱月¹⁾は、「情死を語る詩も其の全編に漲る近松自らの情調は、抑えきれない生の欲舞の聲である。」と述べている。初段では心中の「死」と救済としての「生」が暗示されている。7段までは「死」をうすうす意識しつつも「生」への望みを託している。絶望して「生」への望みが絶たれるも、12段からは「死」の中にありながら再び「生」への執着と死ぬことによって得られる二人の救済が描かれている。13段「道行」で、来世で結ばれることを願う場面。15段で死ぬ間際に両親を懐かしんで「生」の執着を見せる場面。16段は、いざ死ぬ時になっても手が震えてなかなか死にきれないでいる場面である。即ち、死の間際には「生」への執着を見せており、「死」と「生」のコントラストが暗闇のなかの星のように欲舞の聲として響いてくる。

中盤から後半にかけて、主人公の「死」と「生」の感情の動きから島村抱月の述べた情調と一致した。

3.2 「悲」と「喜」の解析結果

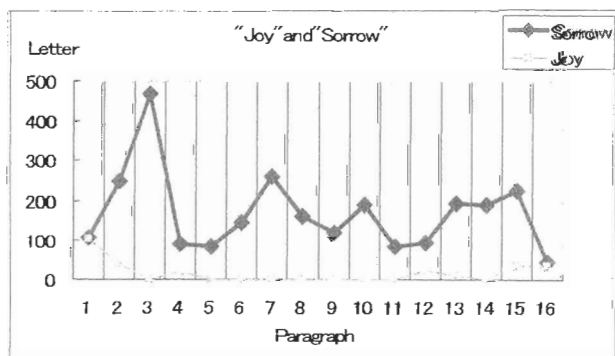


Fig. 2 Elements of "Joy" and "Sorrow" in "The Love Suicide at Sonesaki"

「悲」の表現が多く、3段が一番多い。一方16段の

「道行」では一番少ない。「喜」の表現は前半と後半にわずかに見られ、中盤はゼロとなっている。初段と最終段においては「悲」と「喜」が同じ数値を示している。

心中する場面について荒木繁²⁾は死の苦痛の中には、愛する者のために命を捧げる歓喜のおののきがまじりこんでいるとし、心中者の残酷な業苦が、一転して不思議な陶酔をもよおす秘密をここに認めている。

グラフで16段の「悲」と「喜」が同じ数値を示していることから、荒木繁が述べているように、苦しみと喜びが混じり合い、不思議な陶酔をかもし出していることが認められる。

さらに、初段の「観音廻り」と最終章の「道行」の関係について、今尾哲也³⁾は『観音廻り』と『道行』は照応しており、両者を一なるものとする。『観音廻り』は、破の段をへて『道行』に連絡し、そして『道行』は、再び『観音廻り』に回帰し、両者は循環すると述べている。

初段と最終段の「悲」と「喜」の数値が同じであることから、循環との一致が見られた。

「悲」と「喜」における二つの既往研究においてもグラフと一致し、整合性が認められた。

4. 結論

①作品全体の「死」と「生」の表現グラフから、二つの表現のコントラストが明らかになった。また、心中に向かう「死」の表現の中に現れる近松の情調が抑えきれない生の欲舞の聲とする島村抱月の説が特に中盤から後半にかけて明らかにされた。

②作品全体の「悲」と「喜」の表現グラフから、「喜」が極めて少なく、作品が「悲」に覆われていることが明らかになった。次に、初段と最終段の数値が同一であることから、両者が1つの「道行」であり、循環する関係であることがわかった。さらに、最終段の「悲」と「喜」の数値が同じである事から、心中する場面が残酷に描写されているにも拘わらず不思議な陶酔をもよおすのは、苦しみと喜びが混じり合っているからだとする説との整合性が検証された。

③作品全体を通して、「死」の中に「生」、「悲」の中に「喜」がちりばめられ、少ない表現のコントラストが、一層鮮明になり、主人公の二人の衰れを引き立てる効果を出していることが判明した。

参考文献

- 1) 山根為雄：近松門左衛門集，新編古典文学全集，小学館，(1998)pp13-43.
- 2) 島村抱月：近松の芸術及人生，抱月全集，日本図書センター(1910) pp.202-211.
- 3) 今尾哲也：証稜の原点—「台榭嶺心呻」の場合，文学，岩波書庫，vol.38(1970) pp.31-44.
- 4) 荒木繁：死—近松が描いた世界—，文学至文堂，vol.30，(1965) pp.64-67.